創作狂言

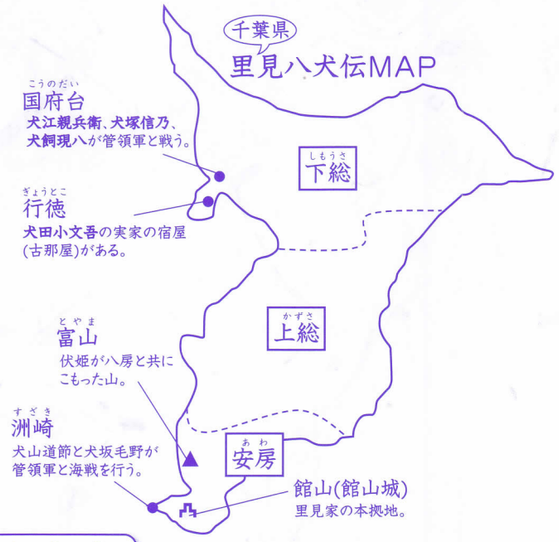
「里見八犬伝 其ノ弐（エピソード ツー）」ガイド

これまでのあらすじ

結城合戦を落ち延びた**里見義実**は、安房の悪政者とその妻**玉梓**を処刑します。しかし、玉梓の怨霊により、娘の**伏姫**を失うことに。臨終の際、伏姫が身につけていた八つの珠は四方八方に飛び散っていきました。

同じく結城合戦に敗れた**犬塚番作**は、**公方家**の宝刀**村雨丸**を託され、故郷の大塚で息子の**犬塚信乃**と暮らしていました。ところが、番作の姉**亀篠**と**蟇六**夫婦が村雨丸を奪おうと画策します。彼らから村雨丸を守るために番作は自害。公方家に村雨丸を返上せよと信乃に言い残し息絶えます。

数年後、**滸我公方（足利成氏）**に村雨丸を献上するために信乃は出立。しかしその村雨丸は偽物とすり替えられていたのです。滸我にて曲者と思われた信乃は、牢から出された武芸の達人**犬飼現八**と芳流閣の屋根で交戦。二人は互いに譲らず、とうとう真っ逆さまに落ちていきました……。



文五兵衛

妙真

舵九郎

沼蘭

房八

八犬士

孝
犬塚信乃戌孝

信
犬飼現八信道

義兄弟

悌
犬田小文吾悌順

仁
大八
（犬江親兵衛仁）

義兄弟

義
犬川荘介義任（額蔵）

探す

丶大

照文

誕生に関わる

玉梓

狂言について

日本の伝統芸能「能楽」という呼称は、“能”と“狂言”とを指します。その歴史は室町時代にまで溯ることができ、現存する世界最古の舞台芸能です。2008年にはUNESCOの「世界無形文化遺産」にも登録されました。

能と狂言は、当初は主に能の演目の間に狂言を挟む、併演の形で演じられてきました。切っても切り離せない、両者の特徴を見てみましょう。

能は、古典文学や伝説を題材とした荘重な歌舞劇で、上演時間は平均で80分ほど。貴族社会を描いたものが多く、その劇中に笑いの表現はめったにありません。

一方、狂言は庶民が活躍する喜劇です。上演時間は平均30分に満たないほどですが、その中には風刺やパロディー、多種多様なおかしさが用意されています。生きていく活力の源たる「笑い」は狂言の欠かせない要素です。世阿弥の時代から、その「笑い」への追及が後世に絶えず受け継がれて現在に至っているのです。

また、謡（うたい）、舞も、能楽の大切な要素です。本日の「雷」の謡は、舞とセットで演じられ、雷鳴が轟いているような迫力があります。

<雷の謡>

ピカーイ
グワラグワラグワラグワラグワラグワラ
降うつ　照らいつ　降うつ　照らいつ
また鳴神は　上がりけり
また鳴神は　上がりけり

■参考文献
小林責（監）、油谷光雄（編）『狂言ハンドブック』（2008）三省堂
曲亭馬琴（著）、石川博（編）『南総里見八犬伝』（2007）角川学芸出版
湯浅佳子（編）『南総里見八犬伝 名場面集』（2007）三弥井書店
板坂則子（監）『学研まんが日本の古典
まんがで読む南総里見八犬伝』（2015）学研プラス

記念スタンプ

★展示ブースでのお楽しみ★